

成田
歴史
玉手箱

12月4日に南羽鳥の埴輪と保目神社の懸仏が成田市指定文化財に

随所に古代成田人の写実的な描写が

南羽鳥正福寺遺跡第1地点第1号墳の埴輪

豊住工業団地の北西部に位置する南羽鳥正福寺1号墳からは、80個体以上の円筒埴輪はにわと4体の人物埴輪や12点の動物埴輪（ムササビ形埴輪・水鳥・鶏・魚・馬）が発見されました。中でもムササビ形埴輪は、日本で初めて発見された埴輪として注目を集めました。

出土した埴輪の最大の特徴は、動物埴輪の数の多さに加え、その特徴を的確にとらえ、写実的な描写が随所に見られることです。ムササビ形埴輪は、飛膜を広げ空中を滑空する姿や手足の二股に分かれた爪、口の両端が後ろに裂ける形が、リス科の特徴をよく表わしています。水鳥は頭部からくばし嘴にかけて鼻孔や耳孔がうがたれ、主翼部分は微妙な凹凸をつけ、上手に羽の質感を出しています。さらにマガモの雄だけに見られる尾羽の上の突起までも忠実に表現されています。これらの動物埴輪と一緒に出土した円筒埴輪から6世紀中ごろのものと考えられています。

20日まで中央公民館で、埴輪と人頭形土製品（県指定）が展示されています



全国各地で展示された正福寺1号墳の埴輪



歴史と伝統文化のまち・成田。市内には、歴史ある文化財が多数あります。

神仏習合を具体的に伝える文化財

保目神社の懸仏（寺台）

円形の鏡板の中心に立体的な仏像を付けたものを懸仏かけぼとけと呼びます。平安時代から江戸時代にかけて製作され、神社や仏堂に奉獻されたものです。保目神社の懸仏は室町時代のものと推定されていますが、明治時代の廃仏棄釈によってそのほとんどが捨てられ、県内でもその所在が明らかになっているものは少なく、神仏習合を具体的に今に伝える文化遺産です。

保目神社の7月の祭礼には、この御正体を御輿みこしに乗せ寺台のけんか御輿と呼ばれたお浜下りが行われました。それが原因で一部が破損し、現在はほかのものを代用しています。



大塚初重 明治大学 名誉教授・成田市文化財 審議委員長 のお話

ムササビやマガモの埴輪は、約1500年前の成田人の作です。夜の森を滑空するムササビへの畏怖、沼に憩うマガモの優しい姿に、亡き人の来世の安らぎを託したのでしょう。懸仏からは、御輿を担ぐ威勢の良い成田っ子の祭姿が浮かびます。



編集後記

また、風邪のはやる季節を迎えました。特に注意が必要なのは症状の激しいインフルエンザです。空気感染しますので、患者が急激に増加する可能性もあります。忘年会や残業など何かと多忙な時期、ついつい無理をしてしまいがちですが、過労や睡眠不足は禁物。「2年越しの風邪で寝正月」とい

うことにならないように、十分な休養と栄養を心掛けましょう。65歳以上のお年寄りには、「予防接種料金を助成する制度」が新設されました。1,000円の自己負担で受けられますので、希望する方は最寄りの指定医療機関（19ページに掲載）でどうぞ。